

***主イエス様が驚いたこと**

主イエス様が「驚いた」のは、四福音書の中で2回しかない。一つが今日の所で、百人隊長の信仰に驚かれた。もう一カ所はマルコの福音書6章6節で、自分の故郷ナザレの人々の不信仰に驚かれた。主は、私たちの内面に関心を持って見ておられ、特に人の信仰に敏感に反応するお方である。

***ローマ軍の百人隊長の信仰**

今日登場してくる「ある百人隊長」は、当時、パレスチナに駐留していたローマ帝国の兵隊である。将校の階級には、千人隊長、百人隊長、十人隊長があり、百人隊長は、約100人の部隊のリーダーであった。この百人隊長はローマ軍に属していて、ユダヤ人から見れば異邦人(外国人)の支配者側の人間である。しかし、ユダヤ人の長老たちが、そんな異邦人のこの百人隊長のために、しかもその「しもべ」のために積極的に行動している理由は何だろうか。それは5節のとおりこの百人隊長は、「私たちの国民、ユダヤ人たちを愛して、私たちのために会堂、シナゴグを建ててくれた」からである。この百人隊長は、ユダヤ人の神、旧約聖書が伝えているヤハウエ、主なる神様を信じていたようだ。この百人隊長の信仰の表れとして、彼は謙遜にユダヤ人に仕え、さらに、私財を投げ打ってユダヤ人のために会堂まで建てて捧げたのである。これは異例のことだ。4節「**イエスのもとに来たその人(長老)たちは、熱心にお願ひして言った。「この人は、あなた(イエス)にそうしていただく資格のある人です。」**」ユダヤ人の長老たちは、自分たちのために働く異邦人には救いを受ける資格がある、と言うのである。

***百人隊長の徹底した謙遜**

ところが、当の百人隊長は、どんな行動を取ったのだろうか。

6、7節で、この百人隊長は、自分の友だちを使いに出して、主イエス様をお迎えすることも、お会いするために出向くこともできない、と言うのである。まことに謙遜だ。この謙虚さはどこから来たのだろうか。自分は異邦人の罪人だから、イエス様を自分の家に入れる資格はないと考え、主なる神様の権威の下に立つことができないと本気で思ったのだろうか。先ほどユダヤ人の長老たちは、「この人は、資格がある」とイエス様に言った。しかし、当の百人隊長は「私のような者は資格がありません」と言ったのである。主イエス様の御前にあってまことに謙っている姿である。

***「おことばを下さい」という信仰**

私たちは誰一人、主の御前に立つ資格がある者などいない。主イエス様は資格のない者を自らの聖さの御前に立たせるために、自ら犠牲になって十字架の死を遂げて下さった。神の救いは、このように謙る者の上に訪れる。この百人隊長は、恐れつつ、主に近づくことすらできないと自ら低くなって、主イエス様に全き信頼をおいた。主イエス様は驚いて、これはイスラエルの内には見たこともない信仰だ、と認めた。主イエス様は、人のどんな生まれや生い立ちや、どんな汚れや失敗や、そんなことで評価しない。「ただ、おことばを下さい」とひれ伏す者に、ひたすら主のお言葉に従順な者に、豊かな恵みと限りない御力を示して下さるのだ。